

## Le Premier Homme への一考察

### —二重の«déraciné»ジャック—

松本陽正

1

すでに別の箇所でも論じたことを辿り直すことから、論を始めたい<sup>1</sup>。  
«Le Premier Homme»なる表題は、一体誰を指しているのだろうか？ いくつ  
か根拠があるが、なによりも、第二部のタイトルが「息子あるいは Le Premier  
Homme」となっている以上、この言葉が、第一義的には主人公ジャックを指  
していることは間違いない。さらに、今一つだけ例をあげておくと、巻末に  
付された「紙片」と「ノートとプラン」双方に、「彼は幼年時代を再び見出すが、  
父を見出しはしない。彼は自分が premier homme だということを知る」«il  
retrouve l'enfance et non le père. Il apprend qu'il est le premier homme» (PH, 265,  
306) という同じ表現が見つかる。このように、「premier homme」がジャック  
を指すことは疑いえないことである。

それでは、この言葉には一体いかなる概念が託されているのだろうか？ 1954  
年、フランク・ジョットランのインタビューに答えて、カミュは次のように  
述べていた。

J'imagine donc un «premier homme» qui part à zéro, qui ne sait ni lire, ni écrire,  
qui n'a ni morale, ni religion.<sup>2</sup>

作家が自己の作品の最良の批評家とは限らないが、Le Premier Homme を目  
にした今、カミュが明確に定義づけていたと首肯される。カミュの言うよう  
に、「premier homme」とは、いわば「ゼロから出発」し、独力で、道徳や宗教  
といった、拠り所とすべき価値体系を打ち立てていかななくてはならぬ存在を

世界」«monde inconnu» (PH, 163, 186, 252)へ踏み出し、自分一人の力で「ゼロから」人生を切り拓いていかななくてはならぬピエ・ノワールのジャックは、まさしく«premier homme»である。

Personne en vérité n'avait jamais appris à l'enfant ce qui était bien ou ce qui était mal. (PH, 86)

[...] il lui [à Jacques] avait fallu apprendre seul, grandir seul, en force, en puissance, trouver seul sa morale et sa vérité, à naître enfin comme homme [...] (PH, 181)

とはいえ、「premier homme」はなにもジャックだけを指すとは限らない。ジャック同様、「過去」「歴史」「伝統」「先祖」「祖国」、それに「宗教」や「神」といった<sup>4</sup>、いわば「父なるもの」、「目印」となるものをもたず、独力で未来を切り拓いていかねばならぬ人々もまた «premiers hommes» なのである。「premiers hommes」とは、言葉を換えれば、価値体系からのデラシネともいえよう。したがって、逆に、アルジェリアで生活しているとはいえ、先程例示したような、「父なるもの」と密接に繋がる人々、つまり存在の根 (racine) を持つ人々は、「premiers hommes」の系譜には属さない。すなわち、「フランスのフランス人(この地方の言葉では«内地人» *français* といった)<sup>5</sup>は含まれないのである。たとえば、家族の歴史があり、フランスを「我らが祖国」«notre patrie» (PH, 191) と呼ぶ<sup>6</sup>、リセの友人ディディエと、ジャックやジャックと出自が同じピエールとは「別種の人間」なのである。

Tandis que Didier savait ce que c' [=la patrie] était, la famille à travers les générations existait fortement pour lui, et le pays où il était né à travers son histoire, il appelait Jeanne d'Arc par son seul prénom, et de même le bien et le mal étaient définis pour lui comme sa destinée présente et future. Jacques, et Pierre aussi, quoique à un moindre degré, se sentait d'une autre espèce, sans passé, ni maison de famille, ni grenier bourré de lettres et de photos, citoyens théoriques d'une nation imprécise où la neige couvrait les toits [...] (PH, 191-192)

このように、「premiers hommes」とは「ゼロから出発」し、価値体系を構築していかななくてはならぬ存在を指すわけだが、しかしながら «premiers hommes» は完全なゼロ状態から出発するわけではない点には、注意を払う必要がある。すなわち、「premiers hommes」は一切の価値から無縁な存在ではないのである。彼らにも「たとえば盗みを禁じたり、母親と妻を守るよう勧める、

もっとも基本的な一つのモラル」(PH, 192)が存在している。このモラルは、『結婚』(1939)所収の『アルジェの夏』にみられたピエ・ノワールの「男」のモラルと同一のものである(II, p.72参照)。このように、「premiers hommes」にも、拠り所とすべき規範がただ一つだけあること、すなわち「男」のモラルが彼らの唯一の支えとなっていることを見落としてはならない。さらにいえば、この「男」のモラルは「名誉」(honneur)と繋がっていてもいた<sup>7</sup>。

とはいえ、「premiers hommes」はなにも、「父なるもの」を持たず、「男」の規範だけで生を切り拓かねばならぬ、ピエ・ノワールに限定されているわけではない。父の面影、入植時の姿を追い求めるジャックの脳裏に、祖国を捨て、存在の根(racine)を求め、未開の土地に乗り込んできた1848年の革命家たちの姿が浮かぶ。敵意に満ちたアラブ人たちの脅威に晒され、多大の犠牲を払いながらも、未知の国に根付こうとし、自分たちの力だけで生き、歴史に爪痕を残さぬまま死んでいった無名の彼らもまた「premiers hommes」であり、その約60年後、同じく故国を捨て、「déraciné」となり、身重の妻と子供を連れ雄々しくアルジェリアに入植し、ほとんど生の痕跡を残さぬまま、忘却のかたに消えていった父もまた、「premier homme」なのである<sup>8</sup>。父をとおして、ジャックは48年の革命家たちに、過去の入植者たちに自分が結ばれているのを感じ、自分たちは一つの「部族」(tribu)「民族」(race)を形成しているとの自覚が生まれるのである。部分的にあげておく<sup>9</sup>。

[...] il [=Jacques] faisait partie aussi de la tribu, [...] cheminant dans la nuit des années sur la terre de l'oubli où chacun était le premier homme, où lui-même avait dû s'élever seul, sans père, [...]. (PH, 180-181)

アルジェリアを指す「忘却の大地、そこでは一人一人が premier homme であり、彼自身、父親もなく成長しなくてはならなかった」とある。遺稿の本文中で「premier homme」という言葉が使われている唯一の箇所である。このように「一人一人が premier hommeであり」とされてはいるが、*Le Premier Homme*を読むとき、少女の不在には驚かされる。少女のこの不在は、きわめて意図的な操作によるもののように思われる。本題からは少しそれるが、以下その点を検証してみたい。

*Le Premier Homme* のタイトルの着想の時期は1953年と考えられるが、『手帖』に見受けられるそれ以前のメモも、*Le Premier Homme* には導入されている。1942年の『手帖』にある「貧しい少年時代」のためのメモもその一つで

ある。

*Enfance pauvre*. L'imperméable trop grand — la sieste. La canette Vinga — les dimanches chez la tante. Les livres — la bibliothèque municipale. Rentrée le soir de Noël et le cadavre devant le restaurant. Les jeux dans la cave (*Jeanne*, Joseph et Max). *Jeanne ramasse tous les boutons*, «*c'est comme ça qu'on devient riche*». Le violon du frère et les séances de chant — Galoufa.

(C2, 41)(*Enfance pauvre* を除く強調は引用者)

列挙されている中で、少女に関する記述だけが遺稿で姿を消している<sup>10</sup>。おそらくカミュが子供のころ一緒に遊んだであろう少女(「ジャンヌ」)は、自伝的作品の第一部第4章「子供の遊び」に登場していない。遺稿の中で、「少女」が重要な意味を帯びているのは、ただ一箇所すぎない。それは次のようなものだ。

[...] chaque jour des centaines d'orphelins naissaient dans tous les coins d'Algérie, arabes et français, fils et filles sans père qui devraient ensuite apprendre à vivre sans leçon et sans héritage. (PH, 70)

「教訓も遺産もなく、生きる術を学ばねばならぬ、父のない少年、少女」、彼らが「premiers hommes」を指すことは明らかである。「premiers hommes」とは、「父なるもの」を持たぬ存在の意であった。この一節にもあるように、両親でいえば、父の不在が「premiers hommes」を生み出すのである。引用文中にある「orphelins」は、「父のない」「sans père」という言葉がその後すぐ補足しているように、「父のいない子」と解釈すべきであろう。母の不在は、この場合、全く問題にならない。男の系譜の欠如、さらに言えば、父と息子との関係の欠如が問題となるのである。それを証拠立てる一節をあげておく。

Des foules entières étaient venues ici depuis plus d'un siècle, avaient labouré, creusé des sillons, de plus en plus profonds en certains endroits, en certains autres de plus en plus tremblés jusqu'à ce qu'une terre légère les recouvre et la région retournait alors aux végétations sauvages, et ils avaient procréé puis disparu. Et ainsi de leurs fils. Et les fils et les petits-fils de ceux-ci s'étaient trouvés sur cette terre comme lui-même s'y était trouvé, sans passé, sans morale, sans leçon, sans religion [...]. (PH, 178) (強調は引用者)

*Le Premier Homme* における少女の不在の理由は、少女がこのような男の系譜から外れている点に求められよう。すでに別のところで論じたように、夕

イトルに含まれる«homme»には「男」の意味が強く含意されていた<sup>11</sup>。少々大胆な見解だが、カミュに推敲する暇があったなら、先にあげた引用文中の「少女」もまた姿を消していたのではないかと思われるのである。

2

存在の根(racine)をもたず(PH, p.179, p.181 参照), 自らの力で根づく場を探求しなくてはならぬ «premier homme» は, 根無し草(déraciné)ともいえる存在である。ところで, 父のないまま育った典型的な «premier homme» であるジャックは, 二重のデラシネともいえるのである。「父なるもの」はもたなかったとはいえ, ジャックには慣れ親しんだ生きる空間(ベルクール)があったし, 「家族」もいた。さらに小学校では「父の代理」ベルナル先生に出会いもした。ところが, 奨学生試験合格によって, ジャックは慣れ親しんだ空間, 「貧者の無邪気で温かい世界から根こぎにされ」, 「父の代理」とも別れ, リセというまったく「未知の世界に投げ込まれ」, 以後は, 誰の「助けもなく, 学び, 理解し, 一人前の男とならなくてはならなくな」ったからである。

[...] puis il se précipitait à la fenêtre, regardant son maître qui le saluait une dernière fois et qui le laissait désormais seul, et, au lieu de la joie du succès, une immense peine d'enfant lui tordait le cœur, comme s'il savait d'avance qu'il venait par ce succès d'être arraché au monde innocent et chaleureux des pauvres, monde refermé sur lui-même comme une île dans la société mais où la misère tient lieu de famille et de solidarité, pour être jeté dans un monde inconnu, qui n'était plus le sien, où il ne pouvait croire que les maîtres fussent plus savants que celui-là dont le cœur savait tout, et il devrait désormais apprendre, comprendre sans aide, devenir un homme enfin sans le secours du seul homme qui lui avait porté secours, grandir et s'élever seul enfin, au prix le plus cher. (PH, 163)

ジャックのこの予感的中することとなる。新聞も本もラジオもない家で生活している, ほとんど文盲といってもいい家族の者たちに, ジャックは「未知の世界」から持ち帰ることを話せない。「家族と彼の間で, 沈黙がひろがって」(PH, 186)いく。一方, リセでも「彼は家族のことは話せない」(PH, p.186, p.230参照)。ジャックは, <二重生活>を強いられることになる。しかし, 力関係ではリセでの生活が優位を占めてくる。というのも, ベルクールでの生活は過去のものだが, 「現在の生活, さらには彼の未来はリセにあっ

た」(PH, 230) からだ。こうして、ジャックは、ベルクールから、家族から、離れていく。そして、今は、子供のころ慣れ親しんだ地を離れ、身内の者たちとも離れ、根無し草となって、ジャックは一人フランスに住んでいるのである(PH, p.76 参照)。

こうみてくると、ジャックが「怪物」である理由も、母に詫びねばならぬ理由も、カミュがこの書を母に捧げた理由も、自ずと明らかになってくる。以下その点を検証していこう。

欄外の加筆には、ジャックが「怪物」(monstre) であるとたびたび記されている。

Dès le début, il faudrait marquer plus le monstre chez Jacques. (PH, 25)<sup>12</sup>

ところが、かつてのカミュにとって、「怪物」なのは、彼の家族の方であった。1946年の『手帖』には、『正義に関する小説』に組み込まれた「貧しい少年時代」に関する次のような記述がある。

Roman. Enfance pauvre. «J'avais honte de ma pauvreté et de ma famille (Mais ce sont des monstres!) [...] (C2, 177)

さらに時代を遡ると、処女作『裏と表』に、祖母の芝居を「ぞっとする」(monstrueuse) としている例もみつかると。

Il[=son petit-fils] ne pouvait se délivrer de l'idée que s'était jouée devant lui la dernière et la plus monstrueuse des simulations de cette femme. (II, 22)

このように「怪物」とされていたのは、彼の家族であって、彼ではなかった。では、*Le Premier Homme*では、なぜジャックが「怪物」なのだろうか<sup>13</sup>。

物語の進展とともに、ジャックがなんらかの過ちを犯すことになっていくことが推測される(PH, p.308, pp.319-320参照)。「怪物」という形容は、おそらくはそれとも強くかかわってはいようが、残された遺稿から判断する限り、今みた、二重のデラシネということと深く繋がっていると思われる。リセへ旅立って以後、ジャックの生活の中で、リセの世界、つまり知識の世界の占める比重が増すこととなった。現在のジャックはフランスに住み、世界を駆け回る知識人になっている(PH, p.182参照)。アルジェの下町ベルクールからは遠く離れた「現在」のジャックは、もはや貧者の世界の住人ではない。貧者の世界は彼にはもう「過去」のものなのだ。先にあげた引用文では、奨学生試

験に合格することによって、ジャックは「貧者の無邪気で温かい世界から根こぎにされ」、リセというまったく「未知の世界に投げ込まれ」たと述べられていた。たしかに、この「根こぎにされ」(être arraché)「投げ込まれ」(être jeté)という受動態の使用にみられるように、ジャックはベルナル先生から指名され、補習授業を受け、試験に合格した。ベルナル先生の思惑どおりの道をジャックは歩まされることとなったのである。さらには、次のような記述もある。

[...] c'était lui (=M.Bernard) qui avait jeté Jacques dans le monde, prenant tout seul la responsabilité de le *déraciner* pour qu'il aille vers de plus grandes découvertes encore. (PH, 149) (強調引用者)

だが、はたしてそんなにも受動的なものだったのだろうか。ジャックが、それにピエールも同様だが、小学校が大好きだったのは、「自分たちの家では見つけることができなかつたもの」(PH, 137) を手にすることができたからではなかつたか。つまり、奨学生試験の話を持ちかけられる以前から、ジャックには「家族の生活からの逃避」願望が、「(知的な)発見への渇き」(PH, 138)があつたのである。そのようなジャックをベルナル先生は導いたにすぎないのである。「現在」のジャックはその点を明瞭に自覚している。

*Et lui qui avait voulu échapper* au pays sans nom, à la foule et à une famille sans nom [...] (PH, 180) (強調引用者)

*Lui avait essayé d'échapper* à l'anonymat, à la vie pauvre, ignorante obstinée, il n'avait pu vivre au niveau de cette patience aveugle, sans phrases, sans autre projet que l'immédiat. (PH, 181-182) (強調引用者)

このように、ジャックは、家族の世界から「逃れようと望み」、「逃れようとした」がために、B.ルクレールの言葉を借りれば「身内の者たちを裏切つた」<sup>14</sup>がために、「怪物」とされているのではなからうか。

「ノートとプラン」には、母の住む世界を離れた後ろめたさが次のように記されている。

Non, je ne suis pas un bon fils: un bon fils est celui qui reste. Moi, j'ai couru le monde, je l'ai trompée avec les vanités, la gloire, cent femmes. (PH, 317)

こうして、結末部でジャックが母に許しを求めることになるというプラン

の意味の一端が自ずと浮かびあがってくる<sup>15</sup>。物語の進展とともに、ジャックが何らかの「罪」を犯すことになっただろうと推測されるが、母に求める許しは、それだけではないはずだ。何よりも今みたように、母の住む世界を意識的に捨てたこと、母には理解不能の世界に分け入ったことに対する許しではなかっただろうか。それを証拠だてるかのように、「紙片」には次のような覚書が残されている。

Il avait été le roi de la vie, couronné de dons éclatants, de désirs, de force, de joie et c'était de tout cela qu'il venait lui demander pardon à elle, qui avait été l'esclave soumise des jours et de la vie, qui ne savait rien, n'avait rien désiré ni osé désirer et qui pourtant avait gardé intacte une vérité qu'il avait perdue et qui seule justifiait qu'on vive. (PH, 273)

ところが、母はといえば、「日々の生活の奴隷であり、何の知識もなく、何一つ望まず、あえて何一つ望もうとせず、それでいて、彼が失ってしまった一つの真実、ただそれだけが生きるのを正当化する一つの真実をそのまま持ち続けていた」のであった。母はそのような真実を示してくれる存在に、そのような真実を「仲介」してくれる存在に他ならない。献辞にある「仲介者：カミュ未亡人」とはそのような意味であろう<sup>16</sup>。

それ故にこそ、表現する術を学び作家となったカミュは、「無言の諦め」(PH, 79)で、「ただ耐える」(PH, 75)だけで、黙したまま語らぬ母に代わって、そして母のために語ろうとし、この書を母に捧げたのではないだろうか。母だけではない。「一つの真実」を持ちつつも、言葉のない世界に生き、歴史の中に埋もれ、消えていく者たちのために、カミュは語ろうとしたのであった。

En somme, je vais parler de ceux que j'aimais. Et de cela seulement. Joie profonde. (PH, 312)<sup>17</sup>

#### 使用エディション：II 1965

\*

1. 詳しくは、拙稿「カミュの *Le Premier Homme* について」、『広島大学文学部紀要』、第54巻、1994、pp.211-229 を参照されたい。なお、*Le Premier Homme* の訳については、大久保敏彦訳、『最初の人間』、新潮社、1996 を参照させていただいた。



2. Franck JOTTERAND, «Entretien avec Albert Camus», *la Gazette de Lausanne*, 27-28 mars 1954, p.9. なお、このインタビューはカミュが初めて第三者に *Le Premier Homme* の構想を明かしたものとしてみわめて重要なものであるが、資料入手にあたっては、フランス留学中だった高塚浩由樹氏に多大のご尽力をいただいた。誌面をかりて、お礼申し述べたい。
3. クリステヴァは、「フランス語では目印 (repère) という言葉の中には、父親 (père) がいる」との興味深い指摘をおこなっている。ジュリア・クリステヴァ「世界の混乱を超えて5」, 朝日新聞, 1995年9月13日。
4. 例示した諸事項については、*PH*, p.178, p.191, p.192, p.256, p.261 等を参照されたい。
5. Herbert R.LOTTMAN, *Albert Camus*, traduit de l'américain par Marianne VÉRON, Seuil, 1978, p.62.
6. それに対し、ジャックにはフランスが祖国だという意識はない。一例をあげておく。«[...] cette notion de patrie était vide de sens pour Jacques[...]»(*PH*, 191)
7. 詳しくは、拙稿「アルベール・カミュにおける〈男〉について」, 『フランス語フランス文学研究』, N°67, 日本フランス語フランス文学会, 1995, pp.71-81を参照されたい。
8. 父もまた幼くして父を失い、孤児院で育ったのであった (*PH*, p.63, p.64, p.66, p.179, p.316 参照)。また、父にみられる「男」の気概については、たとえば、*PH*, pp.66-67 参照。
9. 第一部7章は «premier homme» の意味を知るうえで、重要な章である。とりわけ、*PH*, pp.172-182 参照。
10. 詳しくは、拙稿「*Le Premier Homme* の形成過程」, 『広島大学フランス文学研究』, N°16, 広島大学フランス文学研究会, 1997, p.22を参照されたい。
11. 詳しくは、拙稿「アルベール・カミュにおける〈男〉について」, 前掲書, pp.77-80を参照されたい。
12. *PH*, p.127, p.185も参照。また、*PH*, p.182 には «l'homme monstrueux» とある。さらに、「ノートとプラン」にも、*PH*, p.284 と p.300に «monstre» が、p.308に «monstrueux» がみつかるし、『手帖』の覚書にも «Un peu monstrueux.»(C3, 97) とある。
13. 少々先走るが、東浦弘樹氏は、先にあげた『手帖』の一節を引用した後、「『最初の人間』にみられる価値の逆転は、おそらく、息子が母親と和解し怨恨を捨てたことにともない、息子の批判対象が母親から自分自身へ変わったことによるものであろう。だからこそ、カミュは『最初の人間』の結末に息子が母親に赦しを求める場面(*PH*, 319) を予定していたのではないだろうか。」と述べている。東浦弘樹「カミュ家の肖像『最初の人間』と『裏と表』」, 『フランス研究』, 第30号, 関西学院大学フランス文学会, 1996, p.160.
14. «[...] le livre est traversé par le désarroi d'un «monstre» déraciné, en proie au sentiment tragique d'avoir trahi les siens.» (Bertrand LECLAIR, «34 ans après, Camus l'Algérien

- sort du silence», *InfoMatin*, 13 avril 1994.) なお、同資料入手にあたっては、大久保敏彦氏にご尽力いただいた。誌面をかりて、お礼申し述べたい。
15. 許しを与える者としての母はキリストに擬せられている。「ノートとプラン」には、「ママン。無知なムイシュキンのようなひと。ママンはキリストの生涯を知らない、十字架でのことを別にすれば。それでも、一体誰がママン以上にキリストの近くにいるのだろうか？」(PH, 295)として、文学に現れた無垢の典型ムイシュキンになぞらえ、キリストにもっとも近い存在として母を捉えている記述がある。「ノートとプラン」には、さらに次のようなメモがある。「*Sa mère est le Christ*» (PH, 283)
16. 聖母マリアは、生きている者たちと神との「仲介者」と考えられてきた。3つばかり典拠を示しておく。「[...] l'Église tire l'idée que Marie possède un pouvoir d'intercession unique en son genre [...]» (*Grand Larousse encyclopédique* 7, 1963, p.83.) «L'usage de l'«ave Maria», à côté du «pater», encourage et justifie la croyance en l'efficacité de l'intercession de Marie.» (*Encyclopædia Universalis*, vol.10, 1980, p.526.) «The role of the Virgin as intercessor before God at the general resurrection is seen in representations of the Last Judgement.» (James HALL, *Dictionary of subjects and symbols in art*, John Murray, 1984, p.325.) ところで、*Le Premier Homme* の冒頭部、聖書的世界を髣髴させる主人公誕生の場面では、母はいわばマリア化されている。出産直後の母の聖なる「微笑み」は、顔のみならず、みすばらしい部屋を«transfigurer»させる(「変貌させる／輝かせる」)力をもっている(PH, p.22, p.23 参照)。この点で、賞授与式の日、母が聖母マリアのメダルをつけているのも(PH, p.231 参照)、単なる偶然ではあるまい。マリアのイメージを付与された母は、こうして「仲介者」となるのである。
17. *Le Premier Homme* のおそらくは最初のタイプ原稿を読んだジャン・グルニエも、カミュは表現する術をもたない家族のために語ったのだという。「Il est important de connaître son enfance. Le langage a été pour lui une conquête: son oncle quasi muet, sa mère qui ne parle pas, la grand-mère au langage utilitaire... Albert Camus a voulu parler pour eux.»(Jean GRENIER, *Carnets*, Seghers, 1991, p.415). 妻フランシーヌ・カミュもまた、カミュが「貧者の代弁者」たらんとしていたとの証言を1968年に残している。「Albert Camus avait la nostalgie de la pauvreté originelle: il se considérait comme un porte-parole des pauvres, il aimait le dépouillement total.»(Jean GRENIER, *ibid.*, p.456). ベルトラン・ルクレールは、さらにひろく、カミュが *Le Premier Homme* を書こうとしたのは、「アルジェリアについて、アラブ人にせよヨーロッパ人にせよアルジェリアの地に住む貧者について、〈歴史〉に同意したわけではないが〈歴史〉に犠牲を支払ったあの物言わぬ人々について、真実を語るやむにやまれぬ必要性」からだとしている。(Bertrand LECLAIR, *op. cit.*)